

# 東周代燕國の東方進出

宮  
本  
一  
夫

はじめに

第一章 研究史と問題の所在

第二章 遼西における燕系青銅彝器と青銅武器の編年的位置づけ

(一) 遼西における燕系青銅彝器の編年

(二) 遼西における青銅武器の編年

第三章 燕系副葬陶器の編年的位置づけ

第四章 燕の領域拡大

(一) 燕墓の分布からみた燕の領域

(二) 燕の領域拡大の實年代

第五章 燕の東方進出と中央集権化

おわりに

## はじめに

『史記』匈奴列傳第五十には、燕の將軍秦開が東胡を攻め、その領域を東方に大きく後退させて、上谷郡から遼東郡の五郡を設置して、造陽から襄平に至る長城を築き、東胡との境としたことが述べられる。<sup>①</sup>ここで、秦開は秦始皇帝の暗殺を企てた秦舞陽の祖父であることが述べられているように、五郡設置がおおよそ紀元前三〇〇年頃の燕を再興させ繁榮をもたらし、燕昭王の代と考えるのが一般的である。『三國志』魏書・烏丸鮮卑東夷傳第三十・裴松之注引『魏略』にも、將軍の秦開が燕の領域を滿番汗まで廣げ、朝鮮が弱體化したとされる。<sup>②</sup>朝鮮の領域が具體的にどこであるかは問題であるが、その西隣まで領域を廣げたことになる。さらに、『史記』朝鮮列傳第五十五には、燕は戰國時代には眞番と朝鮮を攻略し官吏を置き城塞を構築したことが記されている。その後、秦が燕を滅ぼすと遼東の外側の地帯を領有し、漢初にはその土地が遠方で守備が困難なところから、古い遼東の城塞を修理して涿水までを國境として燕の領土としたことが記されている。<sup>③</sup>漢初に、戰國燕や統一秦段階で遼東の外側まで領有していたのが遼東まで退いたところから、涿水とは遼東郡の境の鴨綠江である。しかし、戰國燕や統一秦には遼東の外側、すなわち鴨綠江の東側まで領域を廣げていることになる。この地域は、明刀錢や燕圓錢の分布の東限である現在の清川江流域以西（田村二〇〇一、古澤二〇一〇）と考えられる。また、田中俊明も燕の領域の南限である滿番汗の番汗縣を清川江の河口附近と文獻史的検討から考えている（田中二〇〇七）。したがって、戰國燕の秦開の頃である紀元前三〇〇年頃の東方擴大域は、現在の北朝鮮域である清川江まで達し、ここを境界にしていた可能性が高い。

一方、『戰國策』燕策一・蘇秦將爲從北說燕文侯章や『史記』蘇秦列傳第九では、蘇秦が燕の文侯に、燕の東には朝鮮や遼東、北には林胡や樓煩が西には雲中や九原が、南には呼沱や易水があると語る記載がある。紀元前四世紀中頃の燕文侯の頃には、燕の領域の境が東方では朝鮮や遼東にあることが記されており、遼西までは既に紀元前四世紀に燕の領域化

していた可能性が窺える。

ところで、こうした領域の拡大の原因は何であろうか。この時期、鑄造鐵器の生産の始まりと鑄造鐵器の脱炭處理の開發により〔宮本二〇一五〕、農耕具生産の高まりが考えられる。戰國時代の鐵生産の擴大は生産力の擴大を示すものであり、先秦史における大きな變革期であることはこれまで述べられてきたところである〔楊寬一九五五〕。農耕具の發達が土地開發の擴大を意味し、これまでの氏族制社會による舊來氏族からなる社會構造に加え、さらに新興の農民層や商人などの都市住民の出現〔江村二〇〇〇〕が豫想される。さらに、こうした新興階層を取り込んだ人材の登用による王權の強化と中央集權化が、その程度は別として戰國七雄の各國で起きている〔江村二〇〇〇〕。

燕國でも紀元前三世紀の昭王代以降に中央集權化が始まること、〔史記〕匈奴列傳第五十の五郡設置の記載からも知られるが、具體的な中央集權の實態は文献記述にはない。また、郡治などの考古學的資料は不足しており、遺跡からの検討は難しいところがある。一方、別の中央集權化の實態は、武器名や武器型式からの分析によって、昭王以降の常備軍の設置に認められる〔宮本一九八五〕。あるいは陶文に見られる徵稅升の始まりによって明らかにすることができる〔江村二〇〇〇、宮本二〇一二〕。明刀錢の廣がりも郡治支配の廣がりを示していよう〔田村二〇〇一〕。

このように、燕の東方進出は戰國時代燕の中央集權化を示すものであり、領域國家と呼ばれる戰國時代の國家構造の實態を示すものである。筆者は、クラッセン・スカルニークの初期國家の定義〔Classen, H. & Skalnik, P. 1978〕を使い、こうした時期を秦漢の成熟國家の礎をなす時期として、推移的初期國家として位置づけている〔宮本二〇〇七〕。本稿では、燕の東方進出の實態を、考古資料を中心に示すことにより、領域國家の實態の一例である燕國の様相を描こうと思う。さらに、こうした燕の東方進出は、朝鮮半島や日本列島の初期鐵器時代の始まりと大きく關係しているのである〔宮本二〇一七〕。

## 第一章 研究史と問題の所在

戦国時代の物勒工銘とりわけ武器の刻文から、三晉の國別の武器生産の管理機構を明らかにしたのは、佐原康夫であり〔佐原一九八四〕、後にさらに三晉の詳細な検討を行ったのが下田誠の著書である〔下田二〇〇八〕。しかし、それらの論文には燕國のものではなかった。江村治樹は、春秋時代から戦国時代の銅戈・戟の編年とともに銘文内容から、氏族単位で武器生産の管理が行われていたものから、戦国時代後半期の刻文に見られる宰相や王による管理體制への變化を明確に示し、燕の武器銘についても検討している〔江村治樹一九八〇〕。同時期、筆者も戦國七雄の戈・戟・矛を中心とした武器の編年とともに武器銘の變遷から國別の政治體制とりわけ中央集權化の實態を考えようとした〔宮本一九八五〕。この論文では、江村と同じように燕國の鑄銘をもつ青銅武器の分析を行った。両者は、燕昭王から王喜までの變化の中で恵王と武成王の銘文の位置づけを異にするものの、戦國後期における燕國の青銅武器という意味では位置づけを同じくしている。むしろ筆者は武器の形態と呼稱が約一〇〇年間一致しているところから、武器に職掌が示されたものとし、これを燕王の親衛隊を示すものであり、中央集權的な常備軍の存在を考えた。それが始まるのが燕の易王以降の王名を名乗り始めた段階であり、組織的に軍隊の職掌が確立するのが昭王代であると考えた。その時期こそ、王權の確立と常備軍さらには中央集權化が確立したことを意味しており、その段階に燕山以北に燕の五郡という郡縣制が始まっている。また、この中央集權化を示すものとして、國別の度量衡の制定がみられるが、江村治樹は陶文からその實態に迫っている〔江村二〇〇〇〕。また、貨幣の國別の發達や管理・生産に關しても江村治樹の論考〔江村二〇一一〕があり、戦國時代の貨幣の實態が復元された。こうして、燕の中央集權化や郡縣制の一端が知られるようになっていく。

一方、筆者は、燕下都を中心とする燕墓の青銅器編年や副葬陶器編年を行うことにより、燕の墓葬編年を確立した。さらに、燕國の墓葬の分布的な廣がりや燕系青銅器や燕系陶器の廣がりを時空的に明らかにすることにより、春秋後期〜戦

國時代の燕の領域の擴大を示した〔宮本一九九一・二二〇〇〕。その結果、これまで文献記載によつて燕の領域擴大を紀元前三〇〇年頃と考えられていたものから、燕山を超えた遼西西部への領域擴大が紀元前六〜五世紀に遡るものであることが明らかとなった〔宮本二〇〇〇・二二〇七〕。

近年、遼西・遼東など従来遼寧式銅劍にみられるような北方青銅器文化圏であった地域に、灰陶である燕系陶器が副葬される墓葬例が増えている。例えば、遼寧省朝陽市袁臺子墓地〔遼寧省文物考古研究所・朝陽市博物館二〇一〇〕がそれに該当する。このような燕が領域を擴大していく燕山以北の燕系副葬陶器の年代的位置づけから、燕墓の擴大を示すことにより、燕の東方進出を再検討したい。

また、北方系青銅器（遼寧式銅劍）と燕系青銅器が共存する遼寧省建昌縣東大杖子墓地を中心とする副葬品内容から、燕の東方進出に先立って、遼西西部における燕の間接支配の可能性を考えたことがある〔宮本二〇〇七〕。本稿では、東大杖子遺跡の發掘調査概報が出版された現在において、<sup>6)</sup>東大杖子の副葬品内容を再検討すること〔宮本二〇一七〕により、この段階の燕と北方民との關係を再考してみたい。

さらに、近年では燕の副葬青銅器や副葬陶器を検討した石川岳彦の一聯の論考が挙げられる〔石川二〇〇一・二二〇一七〕。その燕國の青銅器や陶器の相對編年は基本的には著者のものと一致するが、一方で武器を中心とする年代觀に筆者との差違を見せている〔石川二〇一七〕。それは燕侯載の青銅器を戰國時代前期の燕成公時期のものと考えることにより、燕の遼東までの東方進出を紀元前四世紀代に遡らせるものであり、ひいては朝鮮半島や日本列島への鐵器の傳播年代を遡らせるものである。特に、西日本に鐵器が出現する彌生前期末・中期初頭の年代を三五〇年頃とする學說〔藤尾二〇〇九〕を追認するものとなっている。しかし、そこで石川が示した青銅戈の年代觀には承服しがたい點がある。特に、燕における中央集權化と東方進出の問題を考える際に、燕の東方進出の絶對年代は、歴史的評價において大きな差異を生み出すものであり、整合的な年代觀を示す必要がある。そこで、青銅武器の型式學的變化から、再度、武器の年代觀を示し、確實な燕

の東方進出の過程を示すことにしたい。また、陶量器の型式變化と陶文内容との對應から、徵稅など中央集權化の過程を示すことにより、燕の東方進出と郡縣制などの中央集權化の因果關係を示すことにしたい。

## 第二章 遼西における燕系青銅彝器と青銅武器の編年的位置づけ

### (一) 遼西における燕系青銅彝器の編年

筆者は、燕下都の東周代墓葬の副葬青銅彝器編年や副葬土器編年を中心とした墓葬編年を示してきた〔宮本一九九一・二〇〇〇〕。近年では、燕山を超えた遼西地域においても、建昌縣東大杖子で燕系青銅彝器や燕系副葬陶器が出土し、朝陽市袁臺子〔遼寧省文物考古研究所・朝陽市博物館二〇一〇〕や遼陽市徐往子戰國墓〔雜寶庫・盧治萍・馬卉二〇一七〕で燕系副葬陶器が出土している。これらの編年的な位置づけを、まず嘗て行った副葬青銅器編年や副葬土器編年に基づいて行っておきたい。これによって、燕の地域支配の擴大の實年代を確認することができるのである。

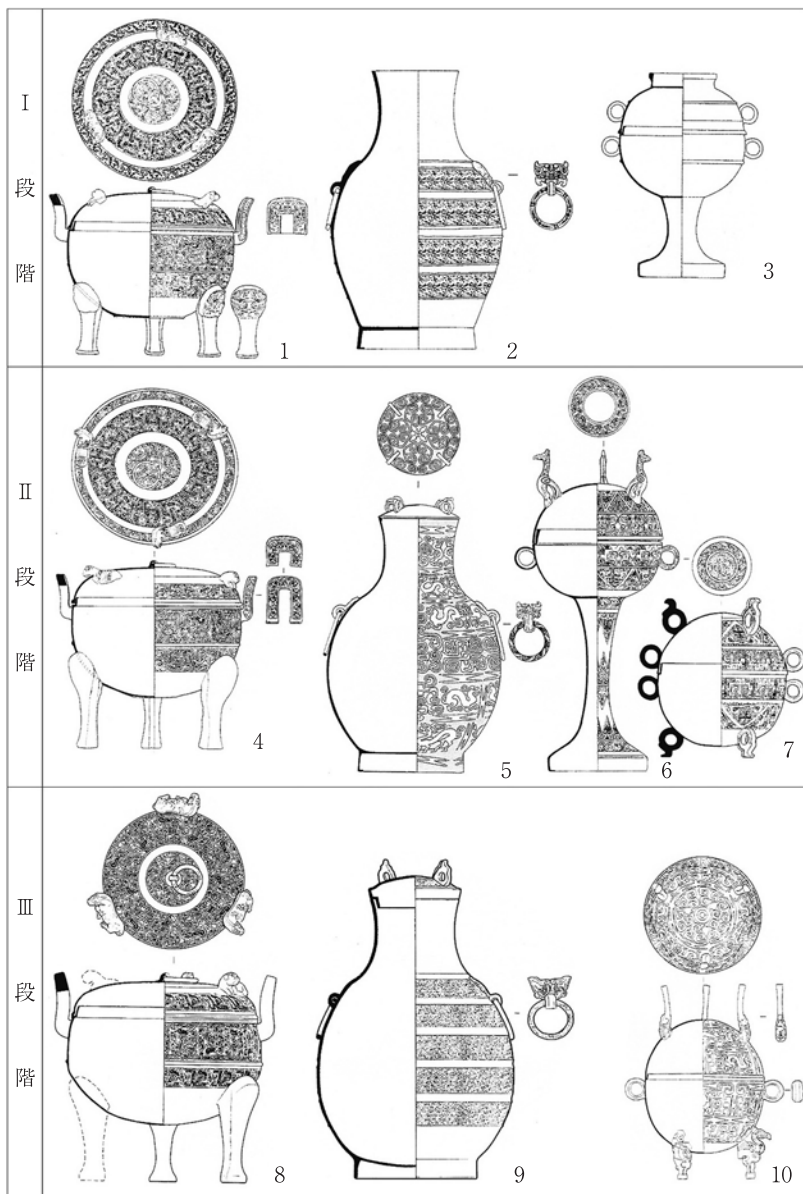
東大杖子では木槨墓の墓壙を磔で充填する封石墓と呼ばれる在地的な墓制があり、これは北方系青銅器文化の夏家店上層の石槨墓の系統を引く墓葬である。被葬者は遼寧式銅劍をもつ北方系青銅器文化の民族でありながら、燕系青銅彝器をも副葬品に持っている。東大杖子45號墓〔遼寧省文物考古研究所・葫蘆島市博物館・建昌縣文物管理所二〇一四c〕や東大杖子11號墓〔遼寧省文物考古研究所・葫蘆島市博物館・建昌縣文物局二〇一五〕で伴出する遼寧式銅劍は、突起がすかすかに残る2a式銅劍である〔宮本二〇〇八〕。こうした遼寧式銅劍2a式に燕系青銅彝器の鼎、壺、豆などが伴っている。また、東大杖子5號墓〔遼寧省文物考古研究所・葫蘆島市博物館・建昌縣文物局二〇一五〕では、突起が完全に消失した遼寧式銅劍2b式〔宮本二〇〇八〕に青銅彝器の敦が相伴している。これらは、先の東大杖子のものより後出するものである。一方、凌源縣三官甸墓地〔遼寧省博物館一九八五〕出土の青銅彝器の鼎は戰國前期の紀元前五世紀後半のものであるが、この墓地から北

方系の遼寧式銅劍2a式が出土しているものの、墓葬単位での共伴関係についての詳しい記述がなく、同時期であるかは不明である。

これらの内、墓葬単位での確かな共伴関係がわかっている東大杖子墓地の一括遺物を中心に、まず青銅彝器の編年的位置づけを行っておきたい(圖1)。この墓地で最も古い段階の青銅彝器は東大杖子45號墓の青銅彝器群(圖1-1~3)であり、河北省唐山市賈各莊18號墓〔安志敏一九五三〕といった紀元前六世紀後半の特徴を示している。一方、東大杖子11號墓の青銅彝器(同4・5)は一段階新しい傾向を示し、北京市通縣中趙甫〔程長新一九八五〕や河北省易縣燕下都31號墓〔河北省文化局文物工作隊一九六五〕などの紀元前五世紀前半の特徴を示す。東大杖子45號墓と11號墓の鼎や壺を比較すると、11號墓の方が45號墓より型式學的に若干新しい傾向にある。鼎の場合、蓋・身ともに圓圈帶を二つ持つ同じ文様構成であるが、底部の平底部が11號墓のもの(同4)が45號墓(同1)より狭くなるとともに、脚部の獸形文が消失しており、新しい傾向を示す。また、壺の胴部の側面形で45號墓の場合(同2)、肩部が張るすなわち胴部最大徑が肩部側にある傾向にあるが、11號墓(同5)では胴部最大徑が肩部側から胴部中央に落ちてくる。東大杖子37號墓〔遼寧省文物考古研究所・葫蘆島市博物館・建昌縣文物管理所二〇一四b〕の敦(同7)は、器形・文様ともに11號墓と同じ段階の中趙甫の敦と同一であり、同段階のものと考えられる。

このような燕の文物が燕山を超えて現れる段階を、これまで何らかの燕の影響を受ける段階として「燕化」という名稱で、その特徴を述べてきた〔宮本二〇〇〇・二〇〇七〕。そこで、燕山を超えて燕の青銅彝器が現れる東大杖子45號墓段階を、遼西の燕化第Ⅰ段階と名附けることとし、紀元前六世紀後半に相當する。一方、型式的に一段階新しい東大杖子11號墓・37號墓は遼西の燕化第Ⅱ段階とすることができ、紀元前五世紀前半に相當する。

これに對し東大杖子32號墓〔遼寧省文物考古研究所・葫蘆島市博物館・建昌縣文物管理所二〇一四a〕は、鼎(同8)では身の口縁部が内傾する傾向にあり、底部が丸底で蓋の圓圈帶も一つになるなど、11號墓(同4)よりさらに新しい傾向を示し、



(1~3 東大杖子 45 號墓、4~6 東大杖子 11 號墓、7 東大杖子 37 號墓、8・9 東大杖子 32 號墓、10 東大杖子 5 號墓)

圖 1 燕山以北の燕系青銅器の編年 (縮尺 1/10)



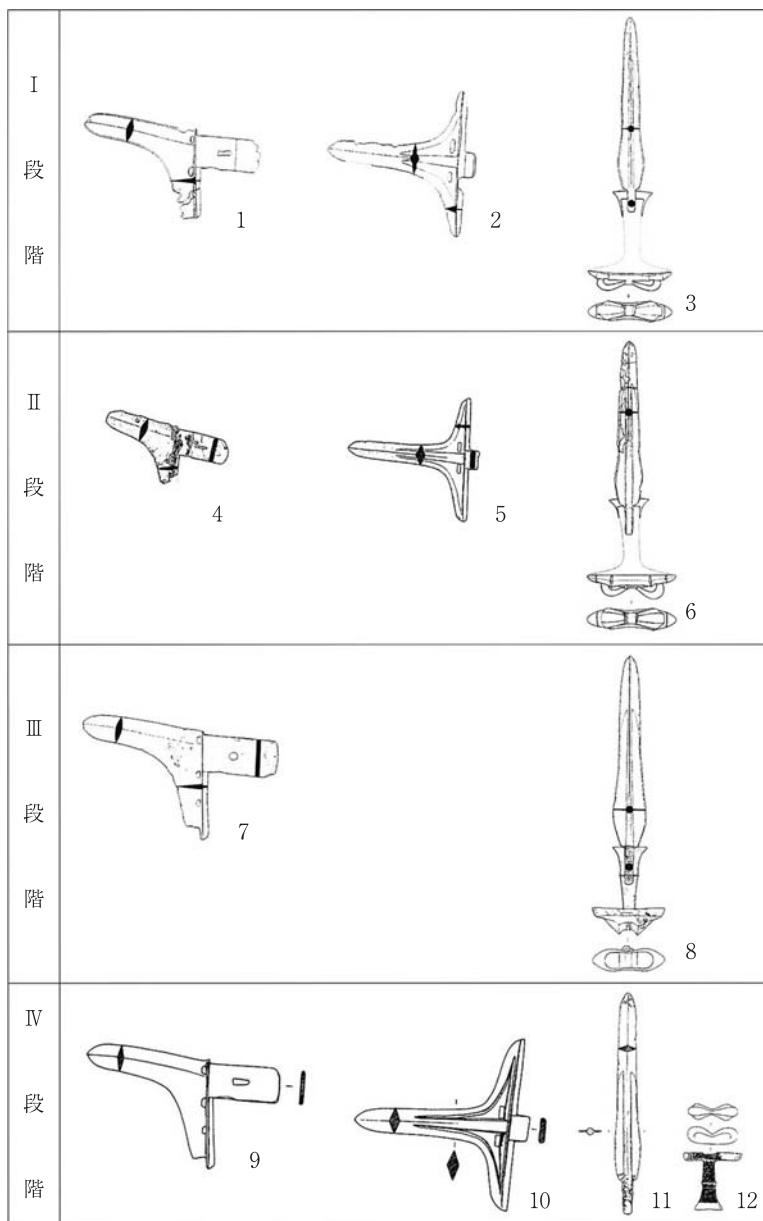
紀元前五世紀後半の特徴を示している。壺(同9)も胴部最大径がより下半部においており、11號墓(同5)より新しい傾向を示し、燕下都西貫城村9號住居址14號墓(河北省文物研究所一九九六a)段階に相當し〔宮本一九九一・二〇〇〇〕、紀元前五世紀後半のものである。東大杖子5號墓(遼寧省文物考古研究所・葫蘆島市博物館・建昌縣文物局二〇一五)の敦(同10)は37號墓の敦(同7)に比べ側面形が長卵化しかつ文様が意匠化しており、37號墓のものより新しい型式である。この段階は燕化第Ⅲ段階であり、紀元前五世紀後半に相當する。さらに重要なことは、遼西の在地系の封石墓において燕系の青銅彝器はこの段階までしか認められない。この段階以降には青銅彝器が伴出しなくなる點が、注目される。

## (二) 遼西における青銅武器の編年

このような青銅彝器の編年に基づきながら、その他の青銅武器編年との相對關係を考えてみたい。まず在地系の遼寧式銅劍ならびに遼西型銅戈の型式を眺めてみることにしよう(圖2)。

遼西燕化第Ⅰ段階の東大杖子45號墓の遼寧式銅劍(圖2-3)は、既に述べたように、銅劍の突起部がかすかに残る遼寧式銅劍2a式段階である。一方、一段階新しい段階と考える東大杖子11號墓も遼寧式銅劍2a式の特徴を示している(同6)。遼寧式銅劍2a式は、山東省杏家莊2號墓で齊國副葬陶器と共存している。齊國副葬陶器の年代から遼寧式銅劍2a式は春秋後期前半の紀元前六世紀後半に存在したと考えられ〔宮本二〇〇六〕、その年代を遅くとも紀元前五〇〇年頃と考えた〔宮本二〇〇八〕。東大杖子墓地の青銅彝器の年代觀と照らし合わせるならば、遼寧式銅劍2a式は紀元前六世紀後半から五世紀前半の幅を持つことになり、杏家莊2號墓の年代を紀元前六世紀後半頃と考えることは矛盾がない。むしろ東大杖子45號墓や杏家莊2號墓の年代からは、遼寧式銅劍2a式の上限年代を紀元前五〇〇年から若干引き上げて紀元前六世紀後半に存在するという當初の考え方を支持することとなった。

一方、青銅敦から遼西燕化第Ⅲ段階であるとした東大杖子5號墓は、遼寧式銅劍の突起部が完全に消失し、膨らんだ關



(1~3 東大杖子 45 號墓、4~6 東大杖子 11 號墓、7·8 東大杖子 5 號墓、9~12 于道溝 1 號墓)

圖 2 燕山以北の青銅武器の編年 (縮尺 戈 1/8、劍 1/10)

部から直線的に刃部が鋒部に向けて延びるもの(同8)が出土している。このような銅劍型式を遼寧式銅劍2b式と呼んでおり(宮本二〇〇八)、「紀元前五世紀後半に相當する。共伴關係は不明であるが、紀元前五世紀後半の鼎が出土した三官甸墓地からは、型式的に古い遼寧式銅劍2a式が出土しており、燕化第Ⅲ段階の實年代を一定程度支持している。

さらに、同じような遼寧式銅劍2b式(同11)が遼寧省建昌縣于道溝1號墓(遼寧省文物考古研究所・葫蘆島市博物館・建昌縣文管所二〇〇六)からも出土している。これは、東大杖子5號墓の遼寧式銅劍2b式(同8)に比べ、鋒部が銅劍半ばまで延びるとともに、脊の稜線が莖側に伸び、かつ關の膨らみが東大杖子5號墓より弱まり銅劍全體がより直刃化するなど、より新しい傾向を帯びている。于道溝1號墓の遼寧式銅劍2b式は、東大杖子2號墓のものと型式差を示し、時間軸上新しい段階のものである。従って、これを一段階新しい燕化第Ⅳ段階に位置づけ、紀元前四世紀前半と考える。

同じく在地系の青銅武器である遼西型銅戈も、燕化第Ⅰ段階の東大杖子45號墓と第Ⅱ段階の11號墓から出土している。遼西型銅戈の編年は近年新たに注目された北方青銅器であるが、基本的な型式變化の方向性は、上下關の退化傾向と樋の發達という2側面がみられる(小林二〇〇八)。さらにこの變化の方向性に従って、遼東を經由して朝鮮半島で細形銅戈へと變化していく。さて、燕化第Ⅰ段階の東大杖子45號墓と燕化第Ⅱ段階の11號墓の遼西型銅戈を比較すると、45號墓の遼西型銅戈の上關・下關が尖り關部も發達しているのに對し(同2)、11號墓のものは關部が幅狹になるとともに反對に樋が鋒部側に延びており(同5)、時期的な變化を明瞭に示している。燕化第Ⅰ段階と第Ⅱ段階の遼西型銅戈は、東大杖子45號墓と11號墓において、青銅彝器と同様に型式差あるいは時期差を示している。燕化第Ⅳ段階とした于道溝1號墓の遼西型銅戈(同10)は、東大杖子11號墓の遼西型銅戈に比べ、樋がより鋒部側に延びるとともに大型化しており、型式的に新しい傾向を示している。遼西型銅戈の型式差からも、燕化第Ⅱ段階と第Ⅳ段階は明瞭に區分することができる。

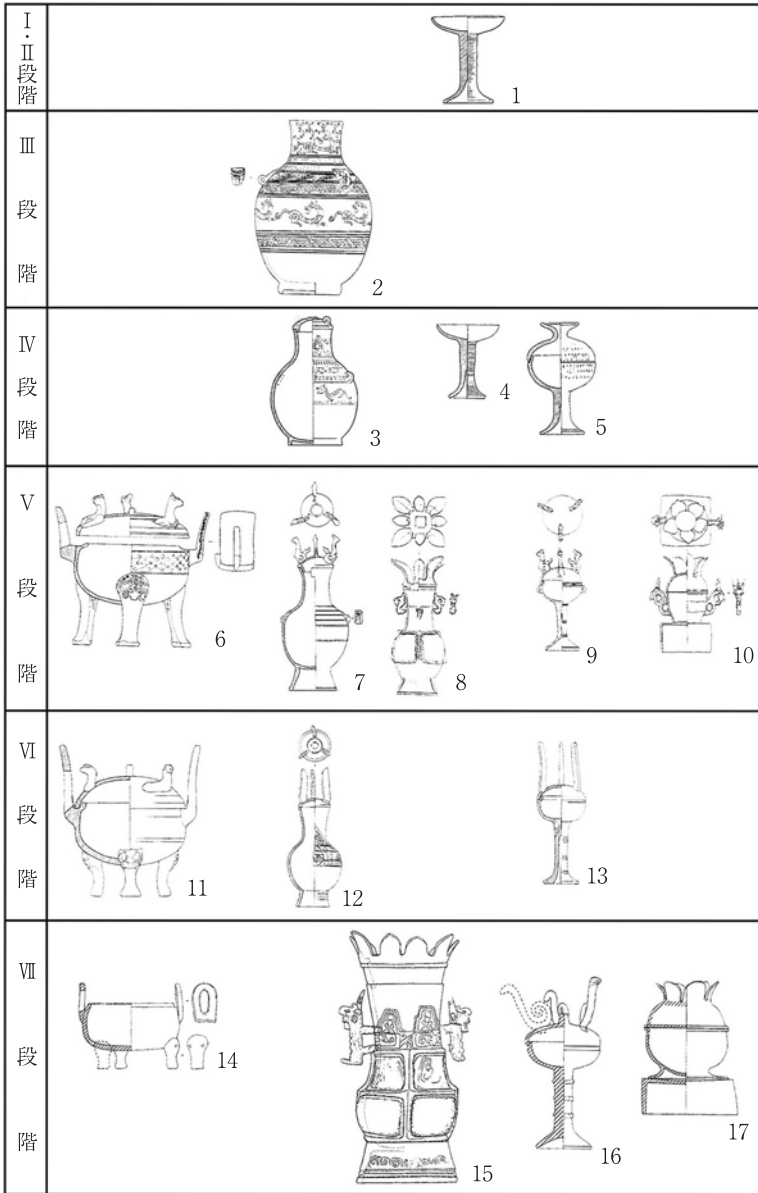
一方、伴出する中原系の青銅戈に關しては、燕化第Ⅰ段階の東大杖子45號墓(同1)から燕化第Ⅳ段階の于道溝1號墓の青銅戈(同9)において、明瞭な型式差は認められない。ただし、この二つの銅戈には上關部分がやや尖る傾向にある

が、こうした形態的な特徴は燕下都31號墓（河北省文化局文物工作隊一九六五）などにも認められる。また、この特徴は春秋前期の特徴を示す河北省懷來甘子堡3・8號墓などの北方系墓地の中原系青銅戈においても認められる（鄭鉉承二〇一七）。さらに陝西省鳳翔縣高莊18號墓などにもみられ、北方青銅器と接する中原北邊域の長城地帯に廣がる中原系銅戈の特徴である可能性もあろう。したがってこうした特徴は、燕山地域の北方系青銅器に伴う中原系銅戈の特徴である可能性が考えられる。しかしながら、後に議論する燕の鑄造銘文を持った典型的な燕系青銅戈は、鄭鉉承も既に指摘しているように、燕山を超えた遼西・遼東の墓葬では發見されていない（鄭鉉承二〇一七）。

### 第三章 燕系副葬陶器の編年的位置づけ

以上の青銅彝器・青銅武器の編年的な位置づけに基づき、遼西・遼東における燕系陶器の編年的な位置づけを行ってみたい（圖3）。

遼寧式銅劍2a式が伴出する東大杖子20號墓（遼寧省文物考古研究所・葫蘆島市博物館・建昌縣文物管理所二〇一四a）は燕化第Ⅰ・Ⅱ段階であり、ここからはその段階の燕系灰陶の無蓋豆（圖3-1）が認められる。明確な燕系副葬陶器の出現は、燕化第Ⅲ段階の東大杖子5號墓の壺（同2）などに認められる。壺の胴部最大徑は胴部中央附近に認められ、この時期の燕系青銅壺とほぼ同じ様式的な特徴を示している。何よりも壺の表面に描かれる虎などの動物文は明確に燕系の副葬陶器であることを示している。遼寧式銅劍2b式の型式差から紀元前四世紀前半と考えた燕化第Ⅳ段階の于道溝1號墓からは有蓋豆（同5）と無蓋豆（同4）、短頸壺が出土している。無蓋豆は燕化第Ⅰ・Ⅱ段階の東大杖子20號墓のもの（同1）より脚部が低く、杯部もより小型化している。有蓋豆は燕下都西貴城村9號住居址8號墓や18號墓の有蓋豆と同じ型式的な特徴を示し（宮本二〇〇〇）、紀元前四世紀前半に位置づけて良いであろう。東大杖子34號墓（遼寧省文物考古研究所・葫蘆島市博物館・建昌縣文物管理所二〇一四b）の壺（同3）は、虎線文が描かれる典型的な燕系灰陶壺である。これは、燕化第Ⅲ



(1 東大杖子 20 號墓、2 東大杖子 5 號墓、3 東大杖子 34 號墓、4・5 于道溝 1 號墓、6~10 東大杖子 40 號墓、11~13 徐往子、14~17 東大杖子 47 號墓)

圖3 燕山以北の燕系副葬陶器の編年 (縮尺 1/20)

段階の同じく虎線文が描かれる東大杖子5號墓の壺より胴部が球形化しており、年代的に新しい燕化第Ⅳ段階のものであり、燕下都灰東村2號墓と同じ型式であり、紀元前四世紀前半に相當する〔宮本二〇〇〕。このように燕化第Ⅳ段階までは、北方系青銅器文化の系統を引く遼寧式銅劍2b式や在地の青銅器である遼西型銅戈とともに燕系の灰陶が伴出する。すなわち在地系の集團が燕との關係の中から燕系の文物を入手する段階ということができよう。

一方、燕化第Ⅴ段階は東大杖子40號墓（遼寧省文物考古研究所・吉林大學邊疆考古研究中心・葫蘆島市博物館・建昌縣文物管理所二〇一四a）にみられるように、燕下都の墓葬に見られる副葬陶器と器種や型式が同じものが出土する段階である。さらに在地系の封石墓ではなく、燕と同じ木槨構造からなる墓制である。東大杖子40號墓は、燕下都29號墓の副葬陶器と様式的にも類似するが、とりわけ東大杖子40號墓の鼎（同6）と燕下都29號墓の鼎は同一型式で同段階である。燕化Ⅴ段階は燕下都29號墓と同じ紀元前四世紀後半とすることができる〔宮本二〇〇〕。この段階から東大杖子墓地においても40號墓の木槨墓にみられるように明確な燕國墓が始まる段階である。

さらに、燕化第Ⅵ段階は遼陽市徐往子（雜寶庫・盧治萍・馬卉二〇一七）にみられ、紀元前四世紀末～紀元前三世紀初頭に相當する。これは、紀元前三二七～三一三年在位の中山王罃墓（河北省文物研究所一九九六b）の副葬陶器と形式的な類似によつて示される。徐往子の壺や豆（同12・13）は燕化Ⅴ段階の東大杖子40號墓よりも全體的に退化傾向を示し、型式的により新しい段階であることを示している。この段階は、燕山以北に五郡が設置される郡縣制が施行された紀元前三〇〇年頃の段階に相當する。徐往子の墓葬構造は不明であるが、副葬陶器の内容はまさに燕そのものであり、遼東郡治は遼陽に存在することからも、燕の遼東郡の設置と聯動した燕墓の出現ということができよう。

燕化第Ⅵ段階よりさらに新しい副葬陶器を示すのが、東大杖子47號墓（遼寧省文物考古研究所・吉林大學邊疆考古研究中心・葫蘆島市博物館・建昌縣文物管理所二〇一四b）である。木槨墓であり、副葬陶器は鼎、有蓋豆、簋、方壺（同14～17）などの燕の副葬陶器からなるものであり、燕墓ということができよう。鼎など燕化第Ⅵ段階より新しい傾向を示し、副葬陶器の内

容は燕下都の辛莊頭墓區30號墓（河北省文物研究所一九九六a）に類似し、紀元前三世紀代の特徴を示している。これは燕化第Ⅶ段階とすることができ、紀元前三世紀に相當し、燕山以北の五郡設置がなされた戰國後期を示している。

さて、辛莊頭墓區30號墓に關しては、韓國の研究者を中心に年代を新しく見なす考え方が近年多い。これを戰國の燕の墓ではなく、趙鎮先は前漢初期（趙鎮先二〇〇九）、金一圭は統一秦から前漢初あるいは前漢初期と考えている（金一圭二〇一六）。その兩者の根據の一つが、辛莊頭墓區30號墓出土の金製長方形帶飾板の年代觀にある。この帶飾板を前漢初期と考える志賀和子の説（志賀一九九六・二〇〇二）に基づくのが趙鎮先であり、長方形帶飾板の独自の編年から辛莊頭墓區30號墓のものを紀元前三世紀末から二世紀初に置くのが金一圭である。しかし黃盛璋は、辛莊頭墓區30號墓の金製長方形帶飾板の刻文の内容から、これを趙の小府専工所で作ったものとしている（黃盛璋一九八五）。近年、趙王陵2號陵から金銅合金の雙獸文からなる長方形帶飾板が出土しており（劉天鷹・陳斌二〇〇八）、趙では戰國後期に長方形帶飾板を生産していたことが知られるに至った。辛莊頭墓區30號墓の金製長方形帶飾板は、戰國後期の趙國製のものであったのであり、紀元前三世紀のものである。また、金一圭は、西安北郊99樂百氏34號墓を紀元前三世紀中葉に下げ、ここで出土している卮が辛莊頭墓區30號墓の卮と同じ型式で前漢初期のものとする（金一圭二〇一六）。しかし、西安北郊99樂百氏34號墓の年代は、出土した土器からすれば前漢初期以前であり、辛莊頭墓區30號墓の卮は戰國後期の長沙楚墓569號墓に近いものであり、紀元前三世紀のものでも問題はない。

辛莊頭墓區30號墓の副葬陶器は、戰國中期後半の燕下都九女臺墓區16號墓などに見られる西周前期の青銅器を模した仿銅副葬陶器からなっており、燕の復古的儀禮を示している。あるいは、燕が周族の姫姓として燕の自己アイデンティティに基づく西周への回歸を示すものである（宮本二〇〇〇）。西周への復古的青銅器は春秋後期に中原一帯で見られたものである（林一九八〇）が、燕では春秋後期の復古的青銅儀禮が彩繪副葬陶器として戰國後半期で盛んとなるのである。それは燕の自己アイデンティティを示すものであり、姫姓の燕が減んだ後の統一秦以降に繼續することはあり得ない。中央集

權化の進んだ統一秦では、そうした舊制度や因習は禁ぜられるであろう。また、辛莊頭墓區30號墓には、第五章で議論する戰國後期の「冕葦」という軍人の職掌ないし階級を示すⅢ式銅戈の明器が副葬されている。被葬者の出自がこうした戰國後期の燕王の軍事組織の上位者であることを示しており、こうした制度や職掌も統一秦以降に存続することはあり得ない。以上から、辛莊頭墓區30號墓は戰國後期の紀元前三世紀に収まるものと考えられる。

趙鎮先は辛莊頭墓區30號墓を前漢初期の紀元前二世紀初頭に位置づけたため〔趙鎮先二〇〇九〕、それに先行する副葬土器を持つ九女代墓區16號墓を紀元前三世紀に位置づけざるを得なくなった〔趙鎮先二〇一五〕。しかし九女代墓區16號墓の副葬陶器では、鼎や壺・有蓋豆が中山國の紀元前三二八年歿の成侯墓〔河北省文物研究所二〇〇五〕や紀元前三一三年歿の譽墓の副葬陶器の型式と類似しており、様式的に戰國中期後半の紀元前四世紀後葉に置くことができるであろう。先に示した徐往子の副葬陶器は、九女代墓區16號墓よりやや新しい傾向を示し、燕化第Ⅵ段階を紀元前四世紀末から三世紀初頭に置くことに問題がないであろう。

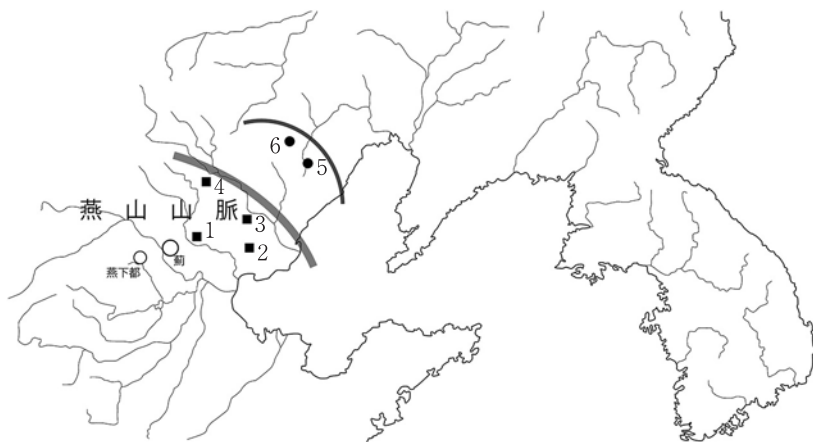
#### 第四章 燕の領域擴大

##### (一) 燕墓の分布からみた燕の領域

このような燕山以北での青銅器・副葬陶器の編年に基づき、燕系文物の時空上の廣がりを考えてみたい。燕化の段階ごとに燕墓あるいは燕系青銅彝器・燕系副葬陶器をもった墓葬の分布を、圖4に表すことにより、燕の領域の擴大を示すことにしたい。

燕化第Ⅰ・Ⅱ段階の紀元前六世紀後半～五世紀前半には、燕の都である現在の北京の薊や副都である燕下都周邊に燕墓が認められるが、さらに燕山山脈には、河北省三河縣雙村1號墓・大唐廻1號墓〔廊坊地區文物管理所・三河縣文化館一九八





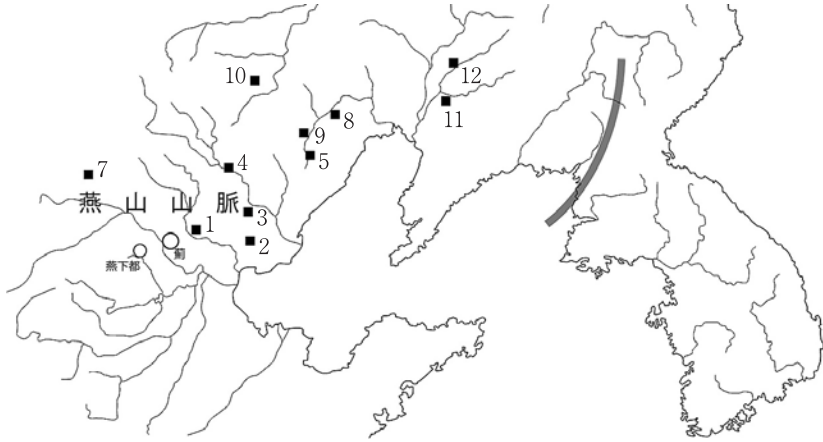
1 燕化 I～IV段階



2 燕化 V段階

(●燕系青銅彝器出土墓、■燕墓)

圖4-1 燕系青銅彝器出土墓・燕墓の東方進出(1)



3 燕化 VI・VII段階

(1 雙村・大唐廻、2 賈各莊、3 大黑汀、4 炮臺山、5 東大杖子、6 三官甸、7 懷柔城北、8 袁臺子、9 眉眼溝、10 赤峰松山區、11 徐往子、12 瀋陽南區)

圖4-2 燕系青銅彝器出土墓・燕墓の東方進出 (2)

七)、河北省遷西縣大黑汀1號墓(顧鐵山・郭景斌一九九六、唐山市文物管理所一九九二)が分布しており、燕の領域は灤河下流域まで達していたと見ることができよう(圖4-1上段)。また、灤河上流域の灤平縣虎什哈炮臺山(河北省文物研究所・承德地區文化局・灤平縣文物管理所一九八三)は山戎の墓として報告されているが、副葬品の内容は銅敦をはじめとして燕墓と同じ内容を示している。遼寧式銅劍などの在地的な要素がないところから、燕墓と見なす。紀元前六世紀後半〜五世紀前半にかけて燕山脈を越えた灤河流域まで燕の領域化したものと考えられる。

同じ時期、灤河下流域よりさらに東方の遼寧省建昌縣東大杖子では45號墓や11號墓が認められるが、これらは封石墓であり、遼寧式銅劍を持つ北方系青銅器民の墓制であるが、燕系青銅彝器を副葬品に持っている。これらの青銅彝器は、在地系集團の中でも遼寧式銅劍・遼西型銅戈など在地首長層に伴う副葬品であり、威信財的な性格を示している。燕系青銅彝器は、燕とのつながりを示すことにより、地域内での社會的地位を保障する威信財となっている。燕においても階層上位者しか副葬されない青銅彝器を持つことは、燕から地域首長に提供された威信財であったと考えるべきであろう。燕は地域首長に青銅彝器とい

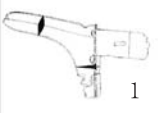
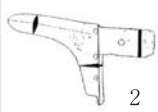
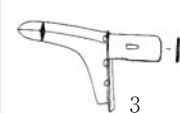
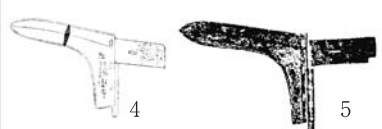
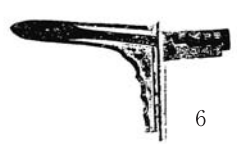

う威信財を下賜することにより、地域首長を介してこの地域を間接的に支配していたことになる。こうした遼寧式銅劍の在地的な特徴を持つ墓は、建昌縣于道溝1號墓のように燕化第IV段階の紀元前四世紀前半まで續いている。このような燕の間接支配地域は、遼西の西部に達していた(圖4-1上段)。

一方、確實に燕墓が東大杖子に認められるのは、燕化第V段階の紀元前四世紀後半である。同じ時期朝陽市袁臺子墓地では、燕系の副葬陶器を持つ燕墓が出現する(圖4-1下段)。袁臺子の報告書(遼寧省文物考古研究所・朝陽市博物館二〇一〇)では、戰國燕墓は一〜三期に分期され、一期墓が戰國中期の早い段階で紀元前五世紀末〜紀元前四世紀中葉、二期墓が戰國中期、三期墓が戰國後期とされる。戰國一期墓とされる1號墓は、たとえば壺でみると、胴部形態が球形化しており、燕化第IV段階とした東大杖子34號墓より型的に下るものである。本稿の分析では、燕化V段階の紀元前四世紀後半以降とすることができよう。おおよそ紀元前四世紀半ば頃には、燕墓が遼寧省の建昌や朝陽まで廣がり、ほぼ遼西に擴大したとすることができよう。

さらに、地域的に擴大して燕墓が認められるのが、燕化第VI・VII段階の紀元前四世紀末以降にある(圖4-2)。遼陽郡治が置かれた遼陽の徐往子墓や瀋陽市南區戰國墓(金殿士一九五九)は燕化第VI段階のものであり、紀元前三〇〇年頃の燕山以北の五郡設置時期と一致している。この他、燕化第VI・VII段階のものとしては、袁臺子以外に、喀左縣大城子眉眼溝(朝陽地區博物館・喀左縣文化館一九八五)、赤峰市松山區(張松柏一九九六)、朝陽市王子墳山墓(遼寧省文物考古研究所・朝陽市博物館一九九七)があげられ、遼西・遼東全域に廣がっている。なお、この時期の遼東郡の東端は、明刀錢の分布から見て北朝鮮の清川江まで廣がっていたと考えるべきであろう。そして前漢初期になると、文献によれば、その領域は鴨綠江まで後退している。

## (二) 燕の領域擴大の實年代

さて、このような燕の領域の擴大にあつて、その年代観において近年發表された石川岳彦の論考〔石川二〇一七〕と差異が認められる。すでに述べた燕の青銅彝器や副葬陶器の編年や相對年代においては、筆者〔宮本一九九一・二〇〇〇〕と石川のもの〔石川二〇一七〕とは大きく異なることがないが、青銅戈の年代観の違いから編年上の實年代観が大きく異なることになる。それは「鄆侯載」銘青銅戈（圖5-5）の年代観の違いからである。従来「鄆侯載」に關しては、郭沫若の「燕成侯」（紀元前四四九〜四三四年）説〔郭沫若一九五二〕と陳夢家の「燕成侯」（紀元前三五八〜三三〇年）説〔陳夢家一九五五〕に分かれている。前者の郭沫若説は、『史記』燕世家「成公十六年卒す、潛公立つ」の『索隱』に「紀年」を按ずるに、成侯名は載なり」を引いて、「鄆侯載」は燕成侯とする。後者の陳夢家は、『三代吉金文存』に載る「鄆侯載簋」の字體が戰國初年のものではなく戰國中期のものであるとし、『竹書紀年』に燕成公と燕成侯があるところから、「鄆侯載」は後者の燕成侯とする。そしてこの燕成侯が『史記』六國年表の『集解』の引く『竹書紀年』に出てくる魏惠王十五年の燕成侯のことであり、魏惠王十五年は燕文公六年に相當することから、「鄆侯載」は燕文公（燕成侯）であるとする。そして、林巳奈夫は「鄆侯載」の青銅器の年代を戰國中期と考え、燕成侯と考えた〔林一九七二〕。筆者は「鄆侯載」戈の器形が戰國中期のものと考え、とりわけ「鄆侯載」戈の側蘭の方形區劃の形態が、燕文公（燕成侯）と同時期の秦の「大良造鞅之造戟」にのみ見られるところから、燕文公（燕成侯）の時期のものと考えた。一方、石川岳彦は「燕侯載」銅豆が戰國前期に遡ることを第一の根據とし、さらに「鄆侯載」戈が紀元前五世紀後半の青銅鼎が出土した凌源市三官甸〔遼寧省博物館一九八五〕の戈と類似することを第二の根據として、「鄆侯載」戈を燕成公の紀元前五世紀後半に遡るとする。しかし、石川が述べる「鄆侯載」銅豆は明確な圖面ではなく、戰國前期に遡る根據とはならず、むしろ戰國中期の器形的特徴を示している。また、紀元前五世紀後半の三官甸の銅戈に「鄆侯載」戈が類似するとするが、その明確な型式學的根據は示さ

|                              |   |
|------------------------------|---|
| <p>I・II<br/>段階</p>           |  <p>1</p>  |
| <p>III<br/>段階</p>            |  <p>2</p>  |
| <p>IV<br/>段階</p>             |  <p>3</p>  |
| <p>燕<br/>成<br/>侯</p>         |  <p>4 5</p> <p>I 式</p>                               |
| <p>燕<br/>易<br/>王・王<br/>噲</p> |  <p>6</p> <p>II a 式</p>                             |
| <p>燕<br/>昭<br/>王</p>         |  <p>7 8 9</p> <p>II b 式 III 式 (冕萃) IV 式 (巨攸・攸)</p> |

(1 東大杖子 45 號墓、2 東大杖子 5 號墓、3 于道溝 1 號墓、4 燕下都、5 燕侯載戈、6 燕侯胥戈、7 燕王職戈、8 燕下都、9 燕下都)

圖 5 燕系青銅戈の變遷 (縮尺 1/10)

れていない。さらに三官甸では、紀元前五世紀後半の銅鼎と石川が類似するとする銅戈が確実に共存するかは不明である。そこで、まず燕における青銅戈の型的な變化を示してから、そこに「鄆侯載」戈を位置づけてその年代的な位置を検證してみたい。

すでに燕化第Ⅰ段階から第Ⅳ段階に至る遼西での青銅戈の變遷を示した(圖5-1-3)。紀元前六世紀後半から四世紀前半に至る中原式銅戈は、大きな器形變化は示さないが、圖5にあるように燕化第Ⅰ・Ⅱ段階から戰國後期に向けて胡に對して援が長くなる傾向にある。燕文公時期と考える「鄆侯載」戈(同5)は紀元前四世紀後半の第Ⅴ段階に位置づけると、援が胡に對してより長くなっており、變化の連續性と合理的に理解することができる。燕下都北沈村出土の「左行議□戈」(同4)は、同じような援と胡の關係を示し、この段階と考えられる。

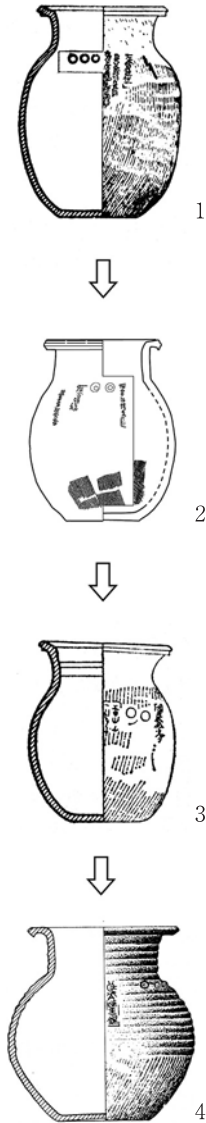
すでに燕の有銘銅戈に關しては編年を示しているが(宮本一九八五)、燕易王(紀元前三三三〜三二一)代と考えるⅡa式戈(同6)さらに燕昭王(紀元前三二二〜二七九)以降のⅡb式戈へと變化していく。「鄆侯載」戈のⅠ式からⅡa式、Ⅱb式への變化は、胡に對して援が長くなるという變化の原則の中であり、矛盾は無い。また、これらは上闌と下闌の間の長方形區劃帶である側闌を持つものであり、同じ系列の銅戈である。Ⅰ式からⅡa式にかけて上闌が三角形に突出していたものから、Ⅱb式では上闌が方形突起へと聯續的な變化を示す。むしろ石川が考えるような「鄆侯載」Ⅰ式戈を紀元前五世紀後半という燕化第Ⅲ段階に置くと、銅戈の變化の連續性に矛盾することになる。また、戰國前期の青銅武器の銘文型式からするとこの段階は氏族名を持つことはあっても王侯名や宰相名の青銅戈銘文は存在しない(江村一九八〇、宮本一九八五)。王侯名や宰相名の青銅戈銘文は戰國中期から出現する。Ⅰ式戈には、著録にみられる「鄆侯載作右軍」や燕下都出土の「鄆侯載作币萃」(中國歷史博物館考古組一九六二)という銘文に、「右軍」や「币萃」という職名すなわち軍事組織が示されている。このような中央集權的な軍事組織は、戰國中期後半以降に知られるものであり、戰國前期まで遡ることはあり得ない。同じ時期と考える「左行議□戈」(同4)は、「左行議」という職名が示され、同時期の銘文體ということ

ができるであろう。

以上の石川の推定への反論からも、「鄆侯載」I式戈（同5）は燕文公（燕成侯）時期であり、これまでの議論（宮本一九八五・二〇〇〇）には問題がないことになる。さらに、燕墓が確實に遼西全域へ広がるのが燕化第V段階の紀元前四世紀後半であり、燕文公（燕成侯）期に相當している。『戰國策』燕策一・蘇秦將爲從北說燕文侯章や『史記』蘇秦列傳第九では、蘇秦が燕の文公に燕の東には朝鮮や遼東があると述べたように、<sup>(8)</sup> 燕文公（燕成侯）期には燕の領域が遼西にまで達していたことが、考古學的にも燕墓の分布の擴大から認めることができたのである。さらに、この燕文公（燕成侯）期は秦では商鞅によって中央集權的な改革が始まっていた時期でもあり、戰國時代の轉換期でもある。

## 第五章 燕の東方進出と中央集權化

このような燕の領域の擴大の理由を考えてみたい。戰國時期、鑄造鐵器の生産の始まりと鑄造鐵器の脱炭處理の開發により、農耕具生産の高まりが認められる（宮本二〇一五）。農耕具の發達が土地開發の擴大を意味し、新興の農民層や商人など都市住民の出現が豫想される。土地開發の擴大が遼西における領域の擴大と關係していることは容易に理解できる。燕化第I・第II段階の灤河流域までの燕の領域の擴大さらには東大杖子などの遼西西部での燕の間接支配である。これらは農耕具の鐵器化に伴う土地開發の擴大を意味しよう。さらに、遼西全域の燕の領域化は燕化第V段階の紀元前四世紀後半の燕文公（燕成侯）期以降に始まっていると言えよう。また、その時期の燕國の副葬陶器には、方壺や簋といった周の禮制に基づく復古的な青銅彝器を模した副葬陶器が現れる。こうした復古的銅禮器が副葬陶器として紀元前四世紀後半代からみられるのは、この時期の燕の擴大期と呼應している。燕の擴大が、周と同じ姫姓である燕にとつて、周の禮制に倣うことで周の正統な後繼者であることを示そうとしていたのではないのか。この時期の王噲の宰相子之への禪讓も、周の王としての威風を示そうとしたものに他ならない。



(1 燕下都、2 東京大學藏、3 燕下都、4 王墳山 29 號墓)

圖 6 燕國陶量器の變遷 (縮尺 1/8)

こういった領域化においては、徴税のための度量衡の制定が必要となる。陶量器がその徴税の機能を果たしている。その陶量器にあたるのが灰陶尊である。そのうちのひとつである東京大學藏の灰陶尊(圖 6-2)は、型式と銘文内容から燕昭王二十二(紀元前二九〇)年と考えられる(宮本二〇二二)。この灰陶尊は、土器内面に製作時の型を取り外しやすくするための布壓痕が残る型作り技法によって作られている。型作り技法は一定の容量を規定した陶器を大量にかつ同形態にする技法であり、徴税のための陶量器の製作に適した製作技法と考えられる。これら陶量器には、「左匄尹罅鑊正器端」「廿二年正月佐匄尹」「左匄攻造」「左匄尹鑊…」といった印文が押されている。左匄尹という官吏が適正な度量衡を管理していることを示すものであったと推測する。これら灰陶尊は燕下都の戰國中期の郎井村 10 號作坊 54 號灰坑(圖 6-1)や戰國後



期の郎井村10號3號住居址(同3)などから出土しており、戦國中期から後期の紀元前四世紀後半から三世紀のものである(宮本二〇二二)。穀物の徴税のための陶量器と考えられ、そうした器の管理はすなわち度量衡の管理であり、その度量衡の質保證が陶文によって示されていると思われる。そうした徴税が始まった段階にこそ、土地開發の必要性があり、それが紀元前四世紀後半に始まる遼西地域への燕の領域化と關係していよう。まさに領域國家の始まりを意味するのである。

このほか朝陽市袁臺子王墳山29號墓から戦國後期末から統一秦期の灰陶尊(同4)が出土しており、印文には「西城都王伏(司)端」とある(遼寧省文物考古研究所・朝陽市博物館二〇一〇)。西城とは遼西郡の柳縣のことであり、柳縣の縣城で管理する陶量器のことである。袁臺子王墳山29號墓の副葬陶器は、燕化第Ⅶ段階のものと異なっており、それらより後出するが、前漢代より古いものである。戦國後期ないし統一秦期の紀元前三世紀には郡縣制が確實に實施され、遼西郡など郡縣によって個々に徴税が行われていたことを示すものである。その他、錦西市集屯や喀左二步尺で陶量が發見されており(遼寧省文物考古研究所・朝陽市博物館二〇一〇)、それらの陶量の容量は郡縣ごとに一定である。

郡縣單位で作られるものは、「益昌」「陽安」「纏坪」などの地名が記された布錢にも示されており(江村二〇一一、金一圭(松村洋介譯)二〇一六)、そうしたものが紀元前三世紀には郡縣單位で作られ、流通していたと考えられる。いわゆる郡縣單位での統治がなされている郡縣制が、紀元前三世紀には燕山以北の五つの郡で行われていたことを示す資料である。右北平郡の石城縣城と考えられている凌源安杖子遺跡(遼寧省文物考古研究所一九九六)や錦西市部集屯小荒地遺跡(吉林大學考古系・遼寧省文物考古研究所一九九七)などの城郭遺跡は戦國後期以降のものであり、燕山以北で郡治が機能していたのは、文献に記載されていたように、紀元前三〇〇年頃以降のことである。紀元前四世紀末から三世紀初頭の徐往墓などの燕墓が遼東に現れるのもまさに遼東郡設置時期からであり、紀元前三〇〇年頃以降の燕昭王代以降に本格化する郡縣制などの中央集權化と對應したものである。

一方、別の中央集權化の實態は、武器名や武器型式からの分析によって、昭王以降に常備軍の設置に認められる。圖5

1759にあるような銅戈型式が鑄造銘文によつて昭王から王喜にかけての約八〇年間存続している(宮本一九八五・二〇〇〇)。しかも銅戈型式と職名が對應する形でほぼ變化することなく繼續して使用されており、銘文にある「御司馬」、「冕萃」、「巨攷」「攷」のような職名があるが、これがそれぞれ銅戈のⅡb式、Ⅲ式、Ⅳa・Ⅳb式と對應している。燕王の直屬の軍隊における職掌が銅戈の型式と對應しており、軍の階級に應じた武器が存在している。これらは燕王直屬の軍隊組織を示しており、常備軍的な存在を示している。後の秦始皇帝の兵馬俑坑にもみられるような軍隊の存在を見いだすことができる。周代の軍構成が氏族單位でなされていたのに對し、この常備軍の存在は戰國後期の燕の中央集權化の一端を示すものであろう。

#### おわりに

本稿では、遼寧省建昌縣東大杖子墓地の分析を行うことにより、燕系遺物である燕系青銅彝器・中原式銅戈や燕系副葬陶器の編年、さらにはそれらに共伴する北方青銅器文化の遼寧式銅劍や遼西型銅戈の編年を試みることに、燕山以北の燕系遺物や燕墓の時空的な擴大を明らかにした。

それによれば、燕山以北という元々北方青銅器文化圏の北方民族が居住していた地域において、燕系遺物あるいは燕墓が擴大していく過程が明らかとなった。そしてその過程は、まず紀元前六世紀後半から五世紀前半における燕山山脈の瀾河流域までの擴大である。そして紀元前四世紀後半の燕文公(燕成侯)時期には遼西まで擴大する。さらに、紀元前四世紀末から三世紀初頭にかけての昭王代には、燕山以北に上谷郡以下五郡を設置し、遼東まで擴大するという文獻的な記載内容を追認する結果となった。そのような燕の東方進出は、農耕社會を背景とした周の諸侯國である燕が擴大していくさまを示している。領域の擴大は、脱炭處理を行った鑄造鐵器による農耕生産の擴大に伴う農耕地の擴大を目指す新たな時代の幕開けであったのである。これまでの氏族社會を崩す新たな經濟的な變革は、新興農民層や商人を含む都市住民とい

うこれまでにない階層を生み出し、そのことが北方民族の土地に新たな農地を求めて拡大して行く領域國家としての燕の動きと聯動しているのである。まさに燕の東方進出は、春秋後期から戰國前期における遼西西部での燕の間接支配、さらに戰國中期後半の遼西一帯の燕の領域化、そして戰國後期にみられる燕山以北の遼東までの郡縣制の確立という形で示されたのである。

こうした燕の東方進出は、玉突き状に遼西東部から遼東にかけての在地文化であった涼泉文化の朝鮮半島への進出を促すものであり〔朴淳發二〇〇四〕、いわゆる朝鮮半島の粘土帶土器文化の起源となっていく〔宮本二〇一七〕。燕の東方進出は遼西・遼東の燕の領域化のみならず、朝鮮半島への新たな文化を引き起こす文化傳播の原因となっていた。いわば燕という領域國家が政治的な支配を廣げることにより、在來民が避難民や移住という形で移動することにより、周邊地域での新たな文化の形成がなされたと想像される。それが朝鮮半島の粘土帶土器文化の成立であり、細形銅劍文化の成立でもあった〔宮本二〇一七〕。そしてこの過程で朝鮮半島や日本列島へ鐵器や鐵器技術が擴散していったのである〔村上一九九八、石川・小林二〇一二、中村二〇一二、宮本二〇一五〕。燕の東方進出は、朝鮮半島や日本列島を含む東北アジアの初期鐵器時代の始まりと對應しており、東北アジア古代史において歴史的一大劃期であったと言えよう。

## 註

- (1) 『史記』匈奴列傳第五十に「其後燕有賢將秦開。爲質於胡、胡甚信之。歸而襲破走東胡。東胡卻千餘里。與荊軻刺秦王秦舞陽者、開之孫也。燕亦築長城、自造陽至襄平。置上谷、漁陽、右北平、遼西、遼東郡以拒胡。」とある。
- (2) 『三國志』魏書・烏丸鮮卑東夷傳第三十裴松之注に「魏略曰……、燕乃遣將秦開、攻其西方。取地二千餘里、至滿
- (3) 『史記』朝鮮列傳第五十五に「自始全燕時嘗略屬眞番朝鮮、爲置吏、築鄣塞。秦滅燕、屬遼東外徼。漢興、爲其遠難守、復修遼東故塞、至涓水爲界、屬燕。」とある。
- (4) 『戰國策』燕策一・蘇秦將爲從北說燕文侯章に「蘇秦將爲從、北說燕文侯曰、燕東有朝鮮遼東、北有林胡樓煩、西

有雲中九原、南有噶沱易水。」とある。

(5) 『史記』蘇秦列傳第九に「說燕文侯曰、燕東有朝鮮遼東、北有林胡樓煩、西有雲中九原、南有噶沱易水」とある。

(6) 遼寧省建昌縣東大杖子墓地は、一部が盗掘を受けたが、發掘調査が行われ、墓地全體の狀況が把握されるようになってきた。現在、七篇の發掘調査概報が報告されている

〔遼寧省文物考古研究所・葫蘆島市博物館・建昌縣文物所 二〇〇六、遼寧省文物考古研究所・葫蘆島市博物館・建昌縣文物管理所二〇一四a、遼寧省文物考古研究所・葫蘆島市博物館・建昌縣文物管理所二〇一四b、遼寧省文物考古研究所・葫蘆島市博物館・建昌縣文物管理所二〇一四c、

遼寧省文物考古研究所・葫蘆島市博物館・建昌縣文物局二

〇一五、遼寧省文物考古研究所・吉林大學邊疆考古研究中心・葫蘆島市博物館・建昌縣文物管理所二〇一四a、遼寧省文物考古研究所・吉林大學邊疆考古研究中心・葫蘆島市博物館・建昌縣文物管理所二〇一四b〕。

(7) 江村治樹はこの戈を形から戰國前期と考えるが〔江村治樹二〇〇〇〕、型式的な特徴はむしろ戰國中期後半と捉えるべきであろう。

(8) 註(4)(5)記事と同じ。

(9) 圖5-8を指す。

## 【参考文献】

日本語 五十音順

石川岳彦 二〇〇一 「戰國期における燕の墓葬について」『東京大學大學院人文社會系研究科・文學部考古學研究室研究紀要』第一六號

石川岳彦 二〇一七 『春秋戰國時代燕國の考古學』雄山閣

石川岳彦・小林青樹 二〇二一 「春秋戰國期の燕國における初期鐵器と東方への擴散」『國立歷史民俗博物館研究報告』第一六七集

江村治樹 一九八〇 「春秋戰國時代の銅戈・戟の編年と銘文」『東方學報』第五二冊

江村治樹 二〇〇〇 「春秋戰國秦漢時代出土文字資料の研究」汲古書院

江村治樹 二〇一〇 「春秋戰國時代青銅貨幣の生成と展望」汲古書院

金一圭（松村洋介譯） 二〇一六 「戰國燕鐵器文化の中國東北地方流入時期」『古文化談叢』第七六集

小林青樹 二〇〇八 「東北アジアにおける銅戈の起源と年代——遼西式銅戈の成立と燕・朝鮮への影響——」『新彌生時代のはじまり 第三卷 東アジア青銅器の系譜』雄山閣

- 佐原康夫 一九八四 『戰國時代の府・庫について』『東洋史研究』第四三卷第一號
- 志賀和子 一九九六 『洛陽金村出土銀器とその刻銘をめぐって』『日本中國考古學會會報』第六號
- 志賀和子 二〇〇二 『漢代北方地域における帶金具の變遷』『中國考古學』第二號
- 下田誠 二〇〇八 『中國古代國家の形成と青銅兵器』汲古書院
- 田中俊明 二〇〇七 『遼東郡の設置と東北アジア——「滿潘汗」の位置を中心に——』『東亞考古論壇』第三輯
- 田村晃一 二〇〇一 『樂浪と高句麗の考古學』同成社
- 中村大介 二〇一二 『燕鐵器の東方展開』『埼玉大學紀要 教養學部』第四八卷第一號
- 林巳奈夫 一九七二 『中國殷周時代の武器』京都大學人文科學研究所
- 林巳奈夫 一九八〇 『周禮』の六尊六彝と考古學遺物』『東方學報』第五二冊
- 藤尾慎一郎 二〇〇九 『彌生時代の實年代』『新彌生時代のはじまり 第四卷 彌生農耕のはじまりとその年代』雄山閣
- 古澤義久 二〇一〇 『中國東北地方・韓半島西北部における戰國・秦・漢初代の方孔圓錢の展開』『古文化談叢』第六四集
- 朴淳發（山本孝文譯） 二〇〇四 『遼寧粘土帶土器文化の韓半島定着過程』『福岡大學考古學論集——小田富士雄先生退職記念——』
- 小田富士雄先生退職記念事業會
- 宮本一夫 一九八五 『七國武器考——戈・戟・矛を中心にして——』『古史春秋』第二號
- 宮本一夫 一九九一 『戰國時代燕國副葬陶器考』『愛媛大學人文學會創立十五周年記念論集』愛媛大學人文學會
- 宮本一夫 二〇〇〇 『中國古代北疆史の考古學的研究』中國書店
- 宮本一夫 二〇〇六 『杏家莊二號墓出土の遼寧式銅劍』『東方はるかなユートピア——煙臺地區出土文物精華——』山口縣立萩美術館・浦上記念館
- 宮本一夫 二〇〇七 『漢と匈奴の國家形成と周邊地域——農耕社會と遊牧社會の成立——』『九州大學21世紀COEプログラム』「アジアと日本・交流と變容」統括ワークショップ報告書、九州大學
- 宮本一夫 二〇〇八 『遼東の遼寧式銅劍から彌生の年代を考える』『史淵』第一四五輯
- 宮本一夫 二〇一二 『樂浪土器の成立と擴散——花盆形土器を中心として——』『史淵』第一四九輯
- 宮本一夫 二〇一五 『中國鐵器生産開始の諸問題』『中國考古學』第一五號
- 宮本一夫 二〇一七 『東北アジアの初期農耕と彌生の起源』同成社
- 村上恭通 一九九八 『鐵と倭人の考古學』青木書店

中國語 拼音順

- 安志敏 一九五三 「河北省唐山市賈各莊發掘報告」『考古學報』第六冊
- 朝陽地區博物館·喀左縣文化館 一九八五 「遼寧喀左大城子眉眼溝戰國墓」『考古』第一期
- 陳夢家 一九五五 『六國紀年』學習生活出版社
- 程長新 一九八五 「北京通縣中趙甫出土一組戰國青銅器」『考古』第八期
- 郭沫若 一九五二 『金文叢考』
- 顧鐵山·郭景斌 一九九六 「河北省遷西縣大黑汀戰國墓」『文物』第三期
- 河北省文化局文物工作隊 一九六五 「一九六四—一九六五年燕下都墓葬發掘報告」『考古』第一期
- 河北省文物研究所 一九九六 a 『燕下都』文物出版社
- 河北省文物研究所 一九九六 b 『魯墓——戰國中山國國王之墓——』文物出版社
- 河北省文物研究所 二〇〇五 『戰國中山國靈壽城一九七五—一九九三年考古發掘報告』文物出版社
- 河北省文物研究所·承德地區文化局·灤平縣文物管理所 一九八三 「灤平縣虎什哈炮臺山山戎墓地的發現」『文物資料叢刊』七
- 黃盛璋 一九八五 「新出戰國金銀器銘文研究(三題)」『古文字研究』第十二輯
- 吉林大學考古系·遼寧省文物考古研究所 一九九七 「遼寧錦西邵集屯小荒地秦漢古城址試掘簡報」『考古學集刊』一一
- 金殿士 一九五九 「瀋陽市南市區發現戰國墓」『文物』第四期
- 廊坊地區文物管理所·三河縣文化館 一九八七 「河北三河大唐廬、雙村戰國墓」『考古』第四期
- 遼寧省博物館 一九八五 「遼寧凌源縣三官甸青銅短劍墓」『考古』第一期
- 遼寧省文物考古研究所 一九九六 「遼寧凌源安杖子古城址發掘報告」『考古學報』第二期
- 遼寧省文物考古研究所·朝陽市博物館 一九九七 「朝陽王子墳墓群一九八七、一九九〇年度考古發掘的主要收穫」『文物』第一期
- 遼寧省文物考古研究所·朝陽市博物館 二〇一〇 『朝陽袁臺子——戰國西漢遺址和西周至十六國時期墓葬』文物出版社
- 遼寧省文物考古研究所·葫蘆島市博物館·建昌縣文管所 二〇〇六 「遼寧建昌于道溝戰國墓地調查發掘簡報」『遼寧省博物館館刊』第一輯
- 遼寧省文物考古研究所·葫蘆島市博物館·建昌縣文物管理所 二〇一四 a 「遼寧建昌縣東大杖子墓地二〇〇一年發掘簡報」『考古』第一二期
- 遼寧省文物考古研究所·葫蘆島市博物館·建昌縣文物管理所 二〇一四 b 「遼寧建昌縣東大杖子墓地二〇〇二年發掘簡報」『考古』第一二期

一二期

遼寧省文物考古研究所·葫蘆島市博物館·建昌縣文物管理所 二〇一四c 「遼寧建昌東大杖子墓地二〇〇三年發掘簡報」『邊疆考古研究』第一八輯

遼寧省文物考古研究所·葫蘆島市博物館·建昌縣文物局 二〇一五 「遼寧建昌東大杖子墓地二〇〇〇年發掘簡報」『文物』第一期

遼寧省文物考古研究所·吉林大學邊疆考古研究中心·葫蘆島市博物館·建昌縣文物管理所 二〇一四a 「遼寧建昌東大杖子墓地M40的發掘」『考古』第二期

遼寧省文物考古研究所·吉林大學邊疆考古研究中心·葫蘆島市博物館·建昌縣文物管理所 二〇一四b 「遼寧建昌縣東大杖子墓地M47的發掘」『考古』第二期

劉天鷹·陳斌 二〇〇八 「戰國趙王陵二號陵出土部分文物論述」『邯鄲職業技術學院』第二卷第一期

唐山市文物管理所 一九九二 「河北省遷西縣大黑汀戰國墓出土青銅器」『文物』第五期

楊寬 一九五五 『戰國史』上海人民出版社

雛寶庫·盧治萍·馬芹 二〇一七 「遼寧遼陽市徐往子戰國墓」『考古』第八期

張松柏 一九九六 「赤峰市紅山區戰國墓清理簡報」『內蒙古文物考古』第一·二期

中國歷史博物館考古組 一九六二 「燕下都城址調查報告」『考古』第一期

韓國語

金一圭 二〇一六 「燕下都辛莊頭墓區30號墓の編年小考」『韓國考古學報』第九九輯

鄭鉉承 二〇一七 「中國冀北·遼西地域中原式銅戈の展開と檢討」『韓國考古學報』第一〇四輯

趙鎮先 二〇〇九 「韓國式銅戈の登場背景と辛莊頭30號墓」『湖南考古學報』三二輯

趙鎮先 二〇一五 「燕下都の造營と都城機能の變遷」『韓國考古學報』第九六輯

英語

Classen, H. & Skahnik, P. 1978 *The Early State*. Mouton publishers, Paris & New York.

## THE YAN STATE'S EASTWARD TERRITORIAL EXPANSION DURING THE EASTERN ZHOU DYNASTY

MIYAMOTO Kazuo

It is clear that the Yan state enlarged its territory beyond the Yanshan Mountains from the 6th to 3rd centuries BC, based on the chronology of ritual bronze vessels, bronze weapons and burial pottery of the Yan state accompanied with the Liaoning-type daggers and Liaoxi-type halberds of Northern bronzes, as indicated by the analysis of graves in the graveyards of Dongdazhangzi, Jianchang Prefecture, Liaoning Province.

This research clarified the processes behind the distribution of Yan artifacts and tombs which emerged in areas originally populated by people associated with Northern bronzes. This process firstly suggests that they spread to the Luanhe River Valley of the Yanshan Mountains during the 6th and 5th centuries BC. Then, during the time of administration of the Yan Wengong (Yan Chenghou), the territory of the Yan state enlarged to encompass the Liaoxi district during the 4th century BC. In addition, this research discovered archaeological evidence for historical documents showing that King Zhaowang founded five administrative offices, such as the Shanggu administration, and that the territory of the Yan state expanded in the Liaodong district from the end of the 4th century to the beginning of the 3rd century BC. The eastward expansion of territory indicated the development of the Yan state, which was one of the Warring States behind agricultural society. The expansion of territory also shows the dawning of a new era, in that the increase of agricultural products grown using decarbonized cast iron tools triggered the expansion of agricultural land. This new economic evolution, which brought about the end of a clan-based society, resulted in a new class of urban citizens the likes of which had hitherto been unknown, including new farmer and merchant classes. This development accords with the movement of the Yan state as one of the Warring States in the manner in which it expanded its territory to seek out new land for fields among the lands of the Northern bronze people. The Yan state's eastward expansion of territory as indicated by archaeological evidence suggests that it indirectly administrated the Liaoxi district during the 6th and 5th centuries BC, that it occupied the whole of the Liaoxi district by the 4th century BC, and that it founded administrative offices reaching to the Liaodong district during the 3rd century BC.



This eastward enlargement of territory by the Yan state indicates not only the extension of the territory of Liaoxi and Liaodong districts but also a cultural movement triggering a new culture on the Korean Peninsula. It also indicates the establishment of the Chondode pottery culture and the slender bronze dagger culture of the Korean Peninsula. As part of this process, iron tools and iron production techniques spread to the Korean Peninsula and then on to the Japanese Archipelago.

## A STUDY OF THE NIGHT IN ANCIENT CHINA : HUMAN ACTION AND THE APPEARANCES OF SUPERNATURAL BEINGS

YAJIMA Akiko

This paper addresses the night in ancient China. In the case of ancient Japanese history, Miyake Kazuo offered the following four points about the night and the sensitivity of people in ancient Japan. First, daytime was a time for human activity, and the sense of sight predominated. Second, nighttime was a time for non-human beings, and the senses of hearing, smell, and touch predominated. Third, non-human beings began to become active in the evening. Fourth, non-humans beings retreat at dawn, and humans find signs of their presence. With reference to these findings, this paper examines the meaning of the night in ancient China from the point of view of human action and appearance of supernatural beings.

First, in regard to human action, we find in the *Zuozhuan* 左傳 that the movement of armies, escapes, invasions, returns, and regicides take place at night. Most of these actions are those that should be conducted in silence or secretly, but a night attack might employ sound effectively to throw an enemy into confusion. Because these cases were irregular events and the Han dynasty prohibited people from going out at night without reason, it appears that actions conducted at night were regarded as outside the normal order.

The second considers the appearances of non-human and supernatural beings. Emperor Wu of the Han conducted the rite worshipping Taiyi 泰一 and performed necromancy throughout the night. And *nuo* 傩 rites were performed with fire to exorcize pestilence on the final night of the year. Yamada Kenji indicated that exorcizing evil birds, such as the Guhuoniao 姑獲鳥 and Guiche 鬼車, which flew over at New Year's night and caused children to become sick, was related to the *nuo*. Because the evils of pestilence visited at night, it is thought that the ancient